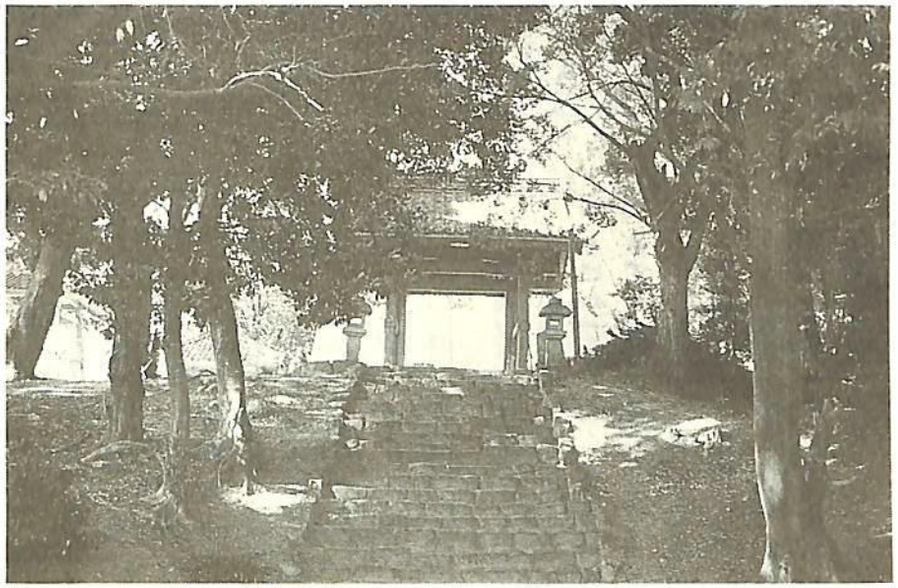
四、学校ニュース



百丈山三善寺

旧国道２４８号線から山門に通じる階段を上ると、樹齢１００年を越すカシの大木が茂る。元禄１２年に当時の上地奉行早川武左衛門により寄進され、雷の災害から上地を救うといわれる「長命地蔵」も祭られている。

九六二名でスタート

学区・学校創立十一年目がスタートしました。

新一年生一五八名を迎え、総勢九六二名の児童数です。

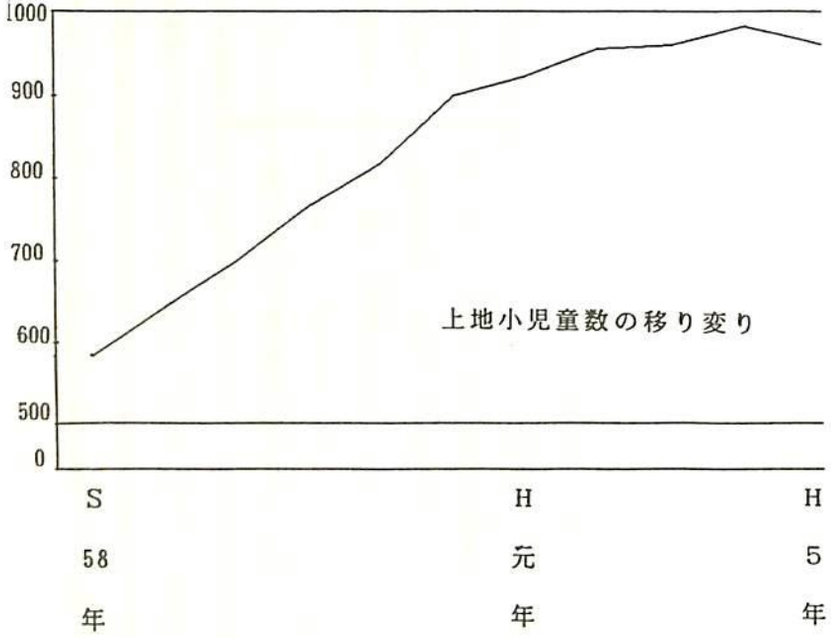
昨年は二八クラスでしたが、本年度は児童数の減少により二六学級です。

内訳は、一年四クラス、二年五クラス、三年四クラス、四年四クラス、五年四クラス、六年五クラスです。

学校創立当時の児童数は、五八二名でした。

下のグラフからもわかるように、ここ数年で児童数の急激な増加もおさまり、安定してきたようです。

十年間で築いてきた上地の良さを継承し、新たな出発を期しております。



クラブ活動始まる

平成五年度のクラブ活動が始まりました。四年生以上の子供たちは、自分の好きな分野を選び毎週木曜日の第六時に活動します。普段の授業と違った面での子供たちの活躍が見られます。毎年クラブ活動の内容が変わります。それは、指導する先生が替わるからです。それぞれのクラブの先生の思いを込めたキャッチフレーズを紹介します。

・マスコット作り	できないと思っている子、集まれー
・ホーム	あなたも今日から花嫁修業。
・文芸（読書）	本の大好きな子集まれー君も作家、絵本を作ろう
・人形劇	人形劇をしたい子、人形を作りたい子集まれー
・ソフトボール	エキサイティングリーグ・上地ー首位打者は誰だー
・音　楽	あなたもミュージシャンーいろいろな楽器に挑戦ー
・俳　句	歩く・食べる・書く・体で俳句を作るクラブです。
・生き物	いろいろな生き物について研究します。
・バドミントン	いつでも、どこでも、だれとでも。
・ペーパークラフト	あなたも紙の芸術家ー
・書道・百人一首	字も、百人一首もうまくなり、一挙両得だよー

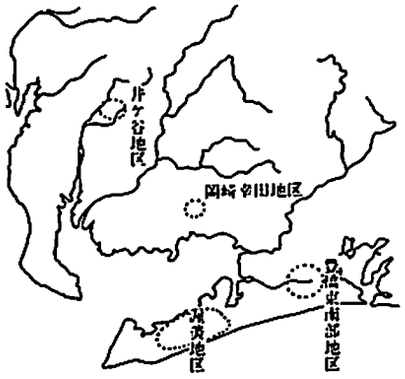
・野外レク	夏は水泳、冬はゲーム
・ＶＴＲ	君をキャッチー
・卓　球	君の心にスマッシューー
・紙ひも工作	今年は、かごもあむよー
・体　操	君もウルトラＣに挑戦だー
・バスケット	バスケット大好きー
・編み物	根気よく編める人、集まれー
・園　芸	新鮮な野菜を食べよう！

上地古窯跡のお話

五月二八日（金）夜七時より、上地市民ホームにおいて、上地の古窯跡についての講話を聞く会がありました。四十名の学区の方々に混じり学校からも八名の先生が参加し勉強しました。講師の先生は、教育委員会社会教育課の荒井信貴さんです。

上地区画整理により発見された三基の登り窯については、学校だより「上地」2月号・3月号で教頭先生が詳しく紹介しました。上地の埋蔵文化財保護の気運が高まる中での、講演会ということで時期を得たものでした。

学校でも、六年生が歴史の勉強の一環として大谷公園北の山中にある堤ケ入古窯跡を訪ねています。堤ケ入古窯跡には近々案内標示板も立てられるということです。



三河の窯業地分布図

柴田賢治総代の開会の言葉、伊藤武司社教委員長の挨拶に続き講演会が始まりました。歴史とは何か、文化財とは何か、日常のできごとと比較しながら歴史の意味を分かりやすく説明していただきました。静かな話し振りの中に、考古学にかける荒井先生の心意気が感じられました。「焼き物と人の歴史」「灰釉陶器と上地の窯跡」と話が進む中、実物標本を回し、観察しながらのお話は一層興味をひくものがありました。また、上矢崎古窯跡発掘当時の貴重なスライドも見せて頂くことができました。千年前の歴史のロマンに触れるとともに、「ふるさと上地」の文化財保護の大切さを考えさせてくれる講演会となりました。

（菅沼　剛）

パワー全開　上地っ子文化祭

六月二十四日、子どもたちが待ちに待った上地っ子文化祭が行われました。代表委員の六年生が中心となって企画・運営されました。上地っ子のパワーを示すのに十分な文化祭でした。午前中は低学年、高学年に別れて音楽鑑賞会を行いました。ステファノ・オペラ劇場団員による独唱、重唱、オペレッタを鑑賞する会です。四重唱、ソプラノ独唱、アルト独唱、テノール独唱、バス独唱と生の声楽に接することができました。低高共通プログラムとして上演されたオペレッタ「河童譚」は、楽しく見ることができ好評でした。

おんがくかんしょうをきいていたら、すごくたかいこえの女の人や、男の人の高いこえやひくいこえがあり、びっくりしました。うたをうたいながらげきをやったのでびっくりしました。わたしは、じぶんたちでつくったのかなあとおもいました。だから、わたしは、いっぱいはくしゅをあげました。　　二年　しみず　ゆみ

わたしがいちばんたのしかったことは、げきです。かっぱや、むかしのおはなしでとてもおもしろかったです。うたのしゅるいもおぼえました。アルトが女のひくい声で、ソプラノが女の高い声で、バスが男のひくい声で、テノールが男の高い声です。　　二年　おぎはら　まなみ

午後は、四年生以上の各学級が工夫をこらして準備したコーナーの公開です。各クラスは、この日のために、何回か学級会を開いて準備を進めてきました。それぞれのクラスの特徴が出ていて、どれもすばらしいコーナーでした。特に、六年生のコーナーは今学習している歴史の内容を低学年に分かりやすく、また楽しく見てもらう工夫が目立ちました。また、学区の動植物を紹介するコーナーも工夫されていました。さすがに六年生という感じでした。

当日の各コーナーの公開に先立って、二十一日、二十二日の二日にわたって、お昼の放送によるTVコマーシャルが流されました。各クラスの、心意気が感じられるTVコマーシャルでした。運営面でも、子どもたちの工夫が随所に見られました。コーナーの宣伝は、ポスター二枚とTVコマーシャルとする。段ボールの配布、スタンプの材料の準備、コーナーの地図、後片づけの指示等々綿密な計画の下に進められている様子がうかがわれました。

また、この日は弁当持ちで、兄弟学級で楽しく会食しました。

一年から三年までの子どもたちは、高学年のお兄さんやお姉さんたちが作ったコーナーを、スタンプラリー形式で楽しく見てまわりました。

わたしは、五つ行きました。いちばんおもしろかったのは、六ねん四くみのげきです。六ねん四くみは音がく室でげきをやっていました。女の子と男の子がローラースケートでスイスイいけてすごいです。げきがおわったら、くろい六年四というはんこうをおしてもらいました。つぎはだい一りか室にいきました。だい一りか室は、六ねん二くみでした。魚とおたまじゃくしとざりがにがいました。色いろいておもしろかったです。　　二年　しばがき　えり

六月の初め、クラスで「縄文人と交流しよう」というテーマに決まり、住居や道具作り等をしてきた。それから二週間縄文土器を焼く日が来た。

初めての体験で、みんなはしゃぎまわっている。焼く準備ができわらに火をつけた。しばらくしてパンパンと音がした。初めは何の音かわからなかったが、それが土器の割れる音だと知りみんなの顔は暗くなり、まったく声も出なかった。午後になり土器を取り出すと、欠けているが原形をとどめているものが十五個あり、これで展示できると胸をなでおろした。

当日コーナーが始まり、他のクラスへも行ってみると、どのクラスも楽しいコーナーばかりで人がずらりと並びすぐに入れないほどだ。

文化祭をやることで、みんなが協力することの素晴らしさと、みんなを楽しませるための工夫の難しさをしみじみと感じた。

そして「パワー全開上地っ子」のテーマにふさわしく、とても良い体験ができてうれしい。

六年　松田　吉史

縄文時代の住居

人気者チョウローも登場

男子バレー全国大会へ

七月四日岡崎市体育館において、第十三回全日本小学生バレーボール愛知県大会が行われました。上地小男子バレークラブは、三年ぶり二度目の県大会優勝を果たし、見事全国大会への出場権を獲得しました。

一回戦

六南ク　2－0　蛭間少年団　　北野　2－0　藤が丘
（岡崎）　（津島）　（岡崎）　（名古屋）

二回戦

植田南　2－0　六南ク　　山中　2－0　田代　　上地　2－0　昭和橋　　矢作北　2－0　北野
（名古屋）　（岡崎）　（名古屋）　（名古屋）

準決勝

山中　2－0　植田南　　上地　2－0　矢作北

決勝

上地　2－0　山中

全国大会は、八月十日から十四日まで東京体育館を主会場として開催されます。

上地小チームは、鈴木尚子、杉本　峰両先生の指導の下に、全国大会を目指して練習してきました。チームの様子を監督の鈴木尚子先生に聞いてみました。

前回の全国大会では、ベスト十六まで進みました。今年は、ベスト八以上をねらいたいです。今年のチームは、センター攻撃の花田を軸に、レフトの筒井、ライトの平沢という攻撃陣。攻撃陣をうまく使いこなす、司令塔のセッター松田。体は小さいが、動きが良くレシーブ力抜群の関口、大野の守備陣。更に進境著しい二橋をはじめとする、奈倉、堀岡、羽根、小田、降旗の控え陣。こういった布陣で、ここまで進んできました。県大会に至るまで、攻撃の主軸花田をけがで欠き、苦しいチーム状況でした。この苦しい状況のなかで、西三河大会を戦い抜きました。西三河大会でのレフト筒井の活躍はめざましいものでした。この苦しいチーム状況の中で、一層チームワークが良くなり、力をつけることができました。

上地小チームは、八月九日に東京へ出発し、十日からの大会に備えます。大会は、東京体育館を中心に、駒沢屋内球技場、町田市立総合体育館、滝野川体育館で行われます。

対戦相手等の詳しい日程は、未定です。

全国大会での、上地小チームの活躍を期待したいと思います。

（菅沼　剛）

運動会云練習たけなわ

十月三日（日）に行われる運動会にむけて、各学年ともに練習に熱が入っています。徒競走、リレー、学級対抗競技とともに、各学年の学習発表があります。それぞれの発達段階に応じて、日頃の体育学習の成果が発表されます。それぞれの演技について、見どころを聞いてみました。

一・二年生　「気分はバブワ晴れ」

・入場は、Ｊリーグのイメージソング「Ｗｅ　ａｒｅ　ｔｈｅ　ｃｈａｎｐｉｏｎ」の曲に合わせて、元気いっぱい行進します。南国少年バブア君のテーマ曲に合わせて元気にかわいく踊ります。元気なかけ声と共に、青空に映える色とりどりのポンポンの美しさも見どころです。

三年生　「みどりと光とぼくたちと」

・緑とオレンジの手旗で表現します。曲は、「原生林」という自然保護を訴える曲です。この曲の中には、ベートーベンの「田園」「第九交響曲」、ムソルグスキーの「はげ山の一夜」などの有名な曲が挿入されています。緑の旗は「木」、オレンジの旗は「光（太陽）」を表しています。柔と剛、静と動の対比を旗でどのように表現するかが見どころです。

四年生「跳べ！上地っ子」

・クラスごとに色分けされた縄を使って演技します。「ロコモーション」の曲に合わせた、楽しい踊りと「愛のウェーブ」の曲をバックに、それぞれの子が自分の得意技を披露します。あや跳び、二重跳び、交差跳び、四年生のみんなが練習した得意技も見どころです。

五・六年生「家康の里・岡崎の四季」

宗次郎の奏でるオカリナの静かなメロディーに合わせて、春と秋を表現します。曲は、「陽春麗」（春）「大地に生きる」（秋）です。春は、桜を、秋はすすきとトンボを表現します。

春と秋の「静」に対して、夏の花火、冬の鬼祭りは激しい動きで表現します。繊細な動き、力強い動き、心をこめた演技とともに集団の美、色彩効果の工夫なども見どころです。

他にも運動会恒例の徒競走がありますが、これも見逃せません。　学年での練習や予行演習でも、子供たちの関心を集めて大いに沸いています。プログラム最後に行われる通学団リレー。これは、子供たちだけでなく、たまたま見学に訪れた学区の方からも熱烈な声援がおくられています。

また、全男・全女種目の「決戦！大谷坂」（帽子取り）「竹取物語」（棒引き）、鼓笛・バトン部による「響け大空へ」の演奏行進も呼び物のひとつです。

いよいよ、十月三日は本番。「力いっぱい」上地っ子の元気な声が運動場にあふれています。

読書月間の取り組み

上地小学校図書館部

本校の図書蔵書冊数は約九千百冊です。三年前に比べると三千冊ぐらい増え、子供たちは学習活動の調べ学習に、または読書タイムに読む楽しみの読書に使っています。特に、十月は読書強調月間として読書意欲を駆り立てるようないろいろな行事が行われました。その主なものを紹介します。

（一）読書標語の募集

三年以上の全員が応募してくれました。

その中で、クラスで一点代表作を審査しました。

（二）図書館しおりの配布

十日間、図書館の本を借りた子の先着百名にしおりを配布しました。みんな競って図書館に通っていました。

（三）ぶどう読書

学年ごとに目標を定め、個表に色を塗ったり、読んだ本を記録しました。全員が目標を達成したクラスが多かったように思います。

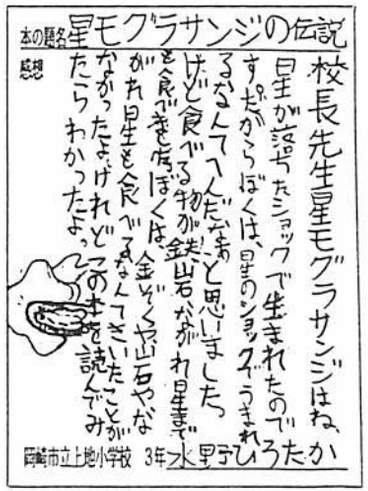
3年	たくさん読もう　読書は心のレストラン	高井遠平
4年	一冊からブクブク広がるぼくらのゆめ	高市裕文
5年	本読めば心の天気ぱっと晴れる	宮　葉月
6年	本読んでぶどう読書は大収穫	金子多衣

（四）ぼくの・わたしのすすめる本

絵と文ですすめたい本を紹介しました。心に残った場面の絵を描き、紹介文を書きました。読む気をそそる楽しいものです。

（五）読書感想文はがき

指定図書6冊を読んで、感想をはがきに書くものです。教室で読み聞かせを聞いたり、自分で読んで、図書の先生まで出してくれました。


本の題名 星モグラサンジの伝説
感想 校長先生星モグラサンジはね、
星が話したショックで生まれたのでしょうたか
すだからぼくは、星のショックでうまれ
るなんてへんだなあと思いました。
けど食べる物が金山石ながれ星まで
を食べきたぼくは、金ぞくや山石やな
かれ星を食べるなんてきいたことが
なかったよけれどつのまを読んでみ
たらわかったよ。
岡崎市立上地小学校 3年 水野ひろ

そのほかにも、本の感想を画用紙いっぱいに描いたり、クラスみんなで同じ本を読み、感想を言い合う中で友達の気づきに感心したりして感動を高めた学級もありました。また、新聞資料で興味のある記事をスクラップしたり、図鑑を使って自分の疑問を解決した子供たちもいました。

子供たちの活動だけで終わらなかった読書月間でもありました。先生たちが心に残った本を『先生のすすめる本』と題して紹介文を書き、渡り廊下に展示しました。やはり先生が紹介した本は子供たちに大好評でした。おうちの方も自信を持って紹介できる本をお持ちになるといいですね。

このように、図書館が積極的に働きかけることによって子供たちが少しでも「本に近づき、本と友だち」になったような気がします。子供たちの読書の芽がしぼまないようにこれからも読書のいざないを続けていきたいと考えています。

みかん収穫に明るい希望

～校地西土手のはっさくみかんが色づく～

松原　晄三

昨年度まで、岡崎市のご好意によって三か年にわたり、校地西斜面の土手に、「八朔みかん」の苗を三十本植樹してきました。また、南土手には、同種のみかんを卒業記念として植樹し続け、六十本が順調に育っています。

今年は、春先から花が咲き、いつみかんがなるのかと楽しみにしてきました。

そんな折、先頃、校地周辺を巡回していて、二本のみかんの木に直径八センチ程のみかんが、色づいているのを発見しました。全校の子供たちが、給食で口にできる日も遠くないことでしょう。

早速長坂信一先生の手で八朔みかんを撮影

泣いた・笑った・力いっぱい学芸会

一月三十日（日）第十一回学芸会が開催されました。八時半開始という早い時間にもかかわらず、会場の体育館は熱心なご父兄の方でいっぱいでした。一・三・五年は学年で音楽、二・四・六年はそれぞれのクラスごとに劇を行いました。

また、家庭科室、図工室ではＰＴＡ役員・部長さんによる学芸会協賛バザーも開かれました。図工室には、大型テレビが設置され体育館での熱演が実況中継されました。こちらの方も大盛況でした。プログラム順に紹介します。

一．音楽　「大地に生きる」３年　大自然の動物の生き様をテーマに、迫力のある、見事な演奏でした。

二．劇　「あわてうさぎ」２の３　うさぎを中心に、かわいい動物たちののびのびした演技が印象的でした。

三．劇　「犬公方綱吉」６の５　歴史の学習を元にした六年生らしい劇でした。コミカルな演技もさすがでした。

四．劇　「おいもはこうしてほられました」４の２　音楽に合わせて、工夫された踊りが随所に見られました。

五．劇　「ガンバとなかまたち」２の４　二年生らしい元気な動作が、舞台いっぱいに繰り広げられました。

六．音楽　「晴れたらいいね他」鼓笛・バトン部　今年度最後の舞台に、新しい曲に取り組んだ熱演でした。

七．劇　「ねずみのすもう」２の１　かわいいねずみたちの演技により、民話の持つ味が良く出ていました。

八．劇　「しあわせの島」６の４　確実な演技力に支えられ、主題を訴える六年生らしいしっかりした劇でした。

九．劇　「たろ天・じろ天」４の３　コミカルな味もだし、四年生らしいしっかりとした演技でさわやかでした。

十．劇　「山椒大夫」６の２　森鷗外の名作の味を、心を込めた演技で観客の涙を誘いました。

十一．音楽　「十一びきのねこ」１年　いつも元気な一年生一五五名、良くまとまって、力いっぱいの演奏でした。

十二．音楽　「ふるさと」５年　さすが五年生。迫力ある、感動的な演奏でした。和太鼓の力強い演奏に思わず拍手が

十三．劇　「こばんの虫ぼし」２の２　かわいらしい動作と繰り返しの妙が生かされた楽しい劇でした。

十四．劇　「エンピツ物語」４の４　鉛筆の種類が良く分かるように工夫され、なるほどとうなずく姿が見られました。

十五．劇　「おれたちの広場」６の３　洗練された歌と踊りによる、スマートな劇でした。バントマイムもよかった。

十六．劇　「王さまめいたんてい」２の５　元気でかわいい演技と、工夫されたカラフルな舞台の楽しい劇でした。

十七．劇　「ものぐさ太郎」４の１　伸び伸びとした、楽しい演技で、民話の味が十分出た舞台でした。

十八．劇　「命の糸」６の１　一つ一つの動作、演技に真剣さが伝わってくる、感動的な舞台でした。

今日の学芸会は今までの中で一番上手にできました。長い間練習をして良かったなと思います。自分のせりふは一言だけだけど、力いっぱいやりました。

特に注意をしてやったのは、目線と動きで、私はその役になりきってやりました。一番最後の場面は、みねがかわいそうという気持ちがいつもの倍くらい伝わってきました。

家に帰ったら、お母さんが

「感動したよ。がんばったね。」

とほめてくれました。

六の一　本多　玲子

学芸会では、自分の持っている力を全部出し切ろうと思っていました。先生に言われたことを頭の中で思い出し、思いっきり演技しました。私のせりふは、なおみちゃんやみさちゃんにくらべて、少ししかないけど、その少しのせりふひとつひとつを誇りに思っていました。

最初の別れの場面でも、そういう気持ちで思いっきり演技したら、なぜか涙がぽぽろぽろ出てきました。山椒太夫の劇を通して、感動できるということはすばらしいことだと思いました。

六の二　金子　多衣

お父さん、お母さん、お客さんや先生、いろいろな人に見てもらうため一か月くらい一生懸命練習してきました。立った一回のためです。でも、六年生最後の思い出として心に残るよう頑張ろうと思いました。私は、一人でしゃべるのは3か所です。そこの時だけ頑張るのではなく、おおぜいでしゃべる所もたくさんあるので、この劇は「全員が主役」と思いました。

本当に「しあわせの島」をやって良かったです。初めて、しあわせは自分たちで作り上げることの大切さを知りました。

六の四　遠藤　友美

ふれあい牧場だより　9

（平成五年四月～十二月）

上地小学校　長坂　信一

● 四月五日（月）　いよいよ明日は入学式

新しく六年生になる子たちが朝から登校して、入学式の準備をしてくれました。体育館のいす並べ、回りの掃除、教室の人数に合わせて机やいすを運んでくれました。どうもありがとう。

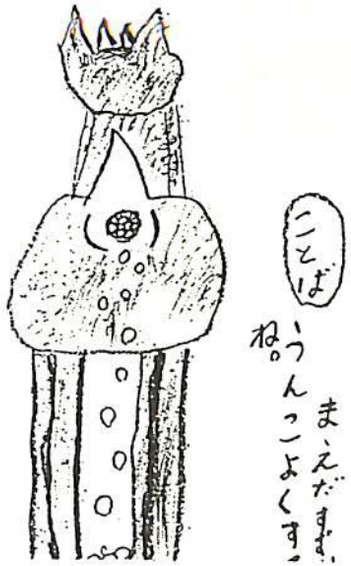
『ふれあい牧場』もきれいにしました。牧場のヤギは特別かわりがありませんが、チャボは頑張って卵を温め始めて一週間くらいです。チャボやニワトリは、卵を温めてから生まれるまで約三週間といわれています。係の子はひなが生まれるのをとても楽しみにしています。四月二十一日（水）ほぼ予定通り。カラスみたいに黒いチャボが親鳥の羽根の下でないています。二日後の二十三日には黄色いチャボも生まれました。

● 五月　五日（水）　卒業生も『ふれあい牧場』を心配しています

四月下旬から五月にかけて休日が続きました。こんな時には動物の世話がむつかしいのです。えさをやり忘れたり、水かえをしないことがよくあります。今日もヤギのことが心配で三時ころ牧場をのぞくと、三月に卒業した佐々木君が牧場に来て、ヤギとチャボの世話をしています。うれしいですね。いつまでも小学校のことを大切に考えていてくれたのです。聞いてみると、連休中にも時々来てくれたそうです。おかげでチャボもヤギも無事に連休が過ぎました。

●五月十五日（土）なかよし池のそうじ

プールそうじをすませた水泳部の子たちと一緒に、今年になって初めてなかよし池の掃除をやりました。久しぶりの掃除で、池が大分汚れていました。だんだん水が減っていくので、デッキブラシを持って、コンクリートの壁をこすります。足もとがつるっとすべります。水が減っていくと大きなコイの背中が映画のジョーズのように水の上に出てきます。残念なことに池の中から小石がごろごろ出てきました。



まえだ　すず（２年５組）

●　六月九日（水）　雨降りの休日

今日は皇太子殿下と雅子様の結婚を祝って、国民の休日となりました。午前中は雨が残っていました。しかしこの雨は恵みの雨で、我々の生活にとって大切なものです。約一週間ほとんど雨が降らず、岡崎市は節水にはいっています。学校のプールは五月三十一日に『プール開きの会』を行いましたが、その後プールの使用を禁止されました。体育館ではバレーボールの練習試合を行っています。さてチョーローはどこでしょう。保健室のすぐ南です。気持ちよさそうにいねむりしています。そおっと行って背中をなでてやりました。びっくりしたチョーローはコッコッと鳴いて首を横に向けました。

『ふれあい牧場』へ足を運ぶと、足音に気づいたチャボが近づいてきました。まずヤギの番です。えさの小屋を開けると、

その音でヤギは何かを感じて鳴きました。バケツに干し草を入れて近づくと、小屋の中から前足を伸ばして「はやくえさをくれ」と請求します。飲み水を確かめてまた入り口のドアーを閉めました。

もう一度階段下の倉庫に戻り、木曜日から日曜日までのチャボのえさをバケツに入れて牧場へ向かいました。いつもはフェンスの外の土手でのんびりしているのに、今日は雨にぬれないように一輪車小屋の下で待っていました。けんかばかりしている若チョーローもとなりで一緒にえさを食べています。

しとしと降る雨はなかよし池にも、降り注ぎます。水をたくさん使えないので濁っています。濁っているというよりアオコが出て、きたない緑色になっています。池の大きさに比べて、ちょっと魚の数が多すぎます。コイの背中だけが上に出て何か変な感じです。

●　六月十日（木）　大変だ、大変だ。チョーローが・・・・・

遠山先生が、心配そうな顔で近づいてきました。

「チョーローのくちばしが折れてしまいました。」

そっと出されたハンカチを見ると、七、八ミリの折れたくちばしが乗っています。よく聞いてみると、しばらく前までにちょっとすじが入っていたそうです。くちばしってすごくよくできています。大きなものから小さなものまで、実にうまくはさんで食べます。そのくちばしの先っぽがちょっとなくなっただけなのに、うまく食べれません。今までと同じようにやっても、えさをはさむことができません。だから今日一日チョーローはいらいらして怒っていました。でも簡単に手助けすることはできません。そんなくちばしでも食べれるように、チョーローが自分自身で覚えなくてはなりません。きびしいですね。

チョーローの長いけづめも、ちょっと心配です。少し、ひびが入っているようですが十センチぐらいになっています。

夜、七時を大分過ぎたころ、迷い犬を連れて丹羽さんと大脇さんが学校へやって来ました。とても人に馴れた犬で、かわいそうだったのでしょう。

何とか飼い主のところへ戻らないかなあと心配しながら犬の進むほうへ歩き始めました。途中で親切なおばさんが、腹が減っているかもしれないとドッグフードをわざわざ家に戻って取りに行ってくれました。

幸い犬は飼い主がわかり、家に戻りました。帰りが遅くなった子供たちは、家で叱られたかもしれませんが、困ったことを見過ごすことなく対処した行動はとても立派だと思いました。

● 六月十七日（木）　チョーローのくちばしは どうなってきたでしょう

チョーローのくちばしはその後どうなったでしょう。上のくちばしが少し伸びてきて、大分上手にえさを食べることができるようになりました。心配していた遠山先生が一番喜んでいます。昨日は大げんかをしていましたが、チョーローのヒステリーもようやくおさまりました。雨があまり降らないので、空気がずいぶん熱くなってきました。人間も「熱い、熱い」といっていますが、チョーローもちょっとぐったりです。そんな時チョーローは花壇で砂浴びをしています。

給食の時間に坂爪先生、酒井さん、菅沼先生と一緒に花子はレインボータワーの近くの山で、散歩をしました。教室から見ていると、まるで犬の散歩です。

● 六月二十日（水）　こらっ、いたずらねこめ

一年一組で「チャボをかおう」ということになりました。みんなで世話をしてくれるでしょう。『ふれあい牧場』からひなが二羽もらわれていきました。チョーロー二世になるでしょうか。いまごろは算数、それとも、国語の勉強をいっしょにやっているのでしょうか。ところで、きょうはチャボたちにとって大変でした。牧場にネコガ現れて、逃げるチャボを殺してしまいました。被害にあったのは、ひなが一匹とだいぶ大きくなった白いピヨピヨでした。首から先が食いちぎられていて、無残な姿で体の部分が残されていました。

きく　ゆりえ（２年５組）

●七月　六日（火）　チョーローが死ぬかもしれない

元気に外で遊ぶことはとてもすばらしいこと。でも、生き物をいじめてはさびしいですね。天気が悪く中庭の山は土がどろどろになっています。チョーローを土の中に押しつけていた子がいました。自分がそんな目にあったらということがまだ考えれないのでしょう。チョーローを水で洗ってきれいにしてから、遠山先生は自分の大事なセーターでチョーローをくるんで暖めながら力づけていました。ひょっとして死んでしまうかもしれないと心配しながら。・・・

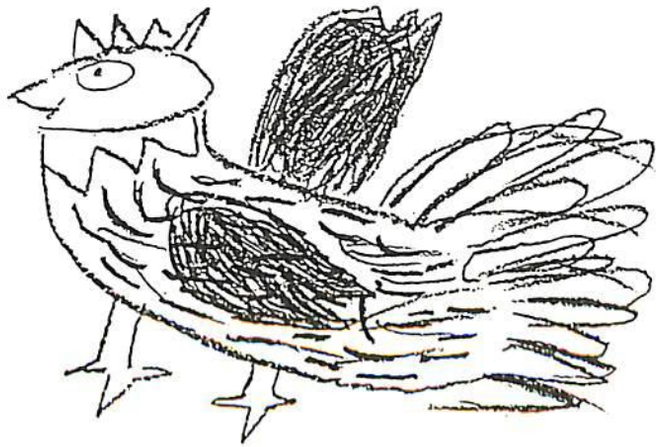
● 七月十一日（日）　ネコに襲われていなくなったはずなのに

夕方のことです。『ふれあい牧場』のとなりからピヨピヨという鳴き声が聞こえてきます。先週、猫に襲われてひよこはいないはずなのに・・・・・・。

昔だれかがカラスと間違えた真っ黒なピーちゃんが、卵を温めていたのを思い出しました。そっと羽根を持ち上げてみると黒っぽいひながいました。だけど、このピーちゃんはエリカと比べて卵の温め方がちょっと下手のようです。次のひながなかなか産まれません。このひなは高市君に育ててもらう予定で、その次は二年五組です。ところが、この間のねこは、味をしめて、ほとんど毎日来ています。親鳥はさすがに強いのであまり襲われませんが、ひなは心配です。動物園に相談に行くと、

「ねこは金網は平気で上るけれど、揺れる網には恐怖心がある みたいだよ」

と教えていただきました。さっそくやってみます。ねこがおどろいてこなくなるといいですね。



竹下　しんや（２年５組）

● 十二月六日　やってきました大きなヤギ

夏から秋、冬にかけて『なかよし池』も『ふれあい牧場』も順調に過ぎていきました。みんなのおかげです。

午前十一時二十分、大きなやぎが上地小学校の『ふれあい牧場』にやって来ました。今まで、『ふれあい牧場』にいたのは九州の屋久島に住んでいたヤクシマヤギの花子が一頭だけでした。今度の大きいやぎは、もっと南の方で住んでいた種類です。その場所はトカラといいます。四年生より上の子は地図帳でさがしてみましょう。とても立派な体で重量感たっぷりです。生まれてから四年目だそうです。人間でいうと三十から四十才くらいです。やぎはとても心の優しい動物です。人間に向かってくることはありませんが、いじめられたり危ないと思った時には、あの角で自分を守ります。そんな時、今までの柵をジャンプして越えてしまうこともあります。竹内先生と一段高く柵を作りました。中へ入る時に頭をぶったりしないようにして下さい。飛び出してしまうともう大人の力でもいうことを聞きません。ものすごい力です。

「むこうのやつ、ひげがすごいね」

「ブタみたいに太っているなあ」

「こわそうだけど、だいじょうぶかな」

「花子と仲良くできるかなあ」

「名前は決まってますか」

やぎに対する思いは子供たちも職員もみんな同じです。ヤギも自分の家が急に変わったので、すごくどきどきしています。その気持ちをわかってあげましょう。トカラヤギの名前は飼育係の五十人で考えます。どんな名前になるのでしょう。かっこいい名前がつくでしょうか。

● 十二月八日　ふれあい牧場によく来てくれました

「新しいやぎってどんなやつかな。」一年生二組の子が『ふれあい牧場』にやって来て、牧場の中に入りました。一組の子もやぎも両方とも、ドキドキです。そこで一分間のストップです。すると、今まで逃げ回っていたやぎたちは、急に落ち着いてゆったりしてしまいました。なぜでしょう。

二年五組の子がやって来ました。冨田先生と一緒です。五組の子の感想がすばらしい。一部ですが紹介します。

★新川　かな　花ちゃん二ひきのやぎさんと仲良くしてね
★しがひとみ　なんかこわいけどかわいいね
★うらたあつこ　なんとなくこわいけどかわいいね
★梅村拓矢　あのめすとなかよくしてね
★嶋田真之介　まえのやぎみたいに死ぬなよ、がんばれ
★かとうじゅん　つのがすごくかっこいい
★そねあゆみ　花ちゃんこわがらないでね。やさしいからね。
★さとうかな子　つのがふとくてつよそうだなと思いました
★菊ゆり恵　ハナちゃんとなかよくしてね
★すぎうらみどり　わたしをこわがらないね
★石川ひろこ・金光まお・かとうみわ・ながいたつや　花ちゃん友だちふえてよかったね
★くらしまゆか・ちのうあすか　あたらしいなかまができてよかったねはなちゃん

夜九時、新しいやぎは小屋の外を歩いています。まだねていません。のっしのっしと歩いています。早く上地小学校になれて、係の子と一緒に散歩ができるといいですね。牧場で困った時は、みんなも落ち着いてストップすると、やぎも急におとなしくなります。

● 十二月十日　やぎの名前は

今度のやぎの名前は、いつも『ふれあい牧場』の世話をしている飼育係の子につけてもらうことにしました。いろいろな名前が候補に上がりました。紹介します。

オス・・・角がすごく太い。太さが何センチなのか、まだこわくてはかれない。生まれて四年目。ひげが長くて迫力満点。重さもずいぶんありそう。どうやってはかろうか。

太郎（本多・森本）　トト（近藤・稲石）　トカラ（池田・本間）　カミル（山本）　トカオ（大林）
トム（三宅）　メーター（小林）　きん（近藤）　キック（山本・今井）　ポコタ（金井）
トラ（高市）　マモー（豊田）　五郎（中原）　ブー助（中村）　かいる　メース（宇野）

メス・・・毛なみがきれい。ちょっと太りぎみ。首に緑の輪をつけている。一番よく慣れてきて、えさを食べる。

花子（本多）　ナナ（近藤・稲石）　チャチャ（池田・本間）　ミルル（山本）　ララ（大林）　ピンク（金井）
めい子（森本）　マリア（三宅）　メリー（小林）　ぎん（近藤）　ヘンリー（山本）　クック（今井）
ララ（高市）　ミモー（豊田）　ブー子（中原）　ブー子（中村）　あすか　オース（宇野）

● 十二月十三日　なかなか小屋に入らない

この二、三日、夜になって『ふれあい牧場』をそっとのぞいてみると、新しく来たトカラヤギは寒いだろうけれども小屋の

中に入らず外で寝ています。まだ慣れていないのでしょう。十日の夜は、かなり激しく雨が降っていました。ひょっとしたらこの雨の中でもぬれているのかと思いましたが、その心配はなく小屋の中に入っていました。

さて、トカラヤギはすごい食欲です。今までのヤクシマヤギとはぜんぜんちがいます。となりのやぎをおしのけてえさを食べる様子はなかなか迫力があり、近くに行くとこっちもついでに角で押されそうになる。

えさをやる時は三か所に分けて置くと、いいかもしれません。教室の学習も、外の遊びもいろいろ工夫するということは生活の知恵につながっていきます。

● 十二月十六日　ヤギはトムとクック

飼育係の投票の結果、おすはトム、めすはクックになりました。トムは覚えやすくてかっこいい（金森、野本、本間、藤本、佐々木、三宅他）。クックはかわいい感じがする。おもしろい（山口、矢田、中野、近藤、今井他）。どうぞよろしく

こんどう　ひさただ（２年５組）

五、寄稿

下校時の安全指導

ＰＴＡ生活指導部　関口　美衣

季節の変わり目になると、よく変質者の話を耳にします。今年も例外ではなく、六月に入って部活動を早めに終えた五年生の男の子が、自転車に乗った男の人に声をかけられたり、お金を出されて「これあげるから、いっしょに来ない。」と連れていかれそうになりました。

「えーっ、そんなことが。」と驚かされるようなことが、現実に起きています。

そこで生活指導部では、二学期から予定していた下校時の安全指導を、夏休み前にも、一、二度実施してみてはということになりました。その一回目が六月二十四日の夕方行われました。生活指導部で相談し、危険だと思われるところを選び二三人ずつのチームを作り、立ってみました。

安全指導を行った場所　（五時半から六時半ころまで実施）

①奥山田池南側の通学路

②上地自動車学校側から十区へ抜ける衣浦線の地下道

③四区、五区へ抜ける二四八号線の地下道

④ミルミル前の二四八号線の地下道

⑤サークルＫ前の交差点

以下は、安全指導に立ってみた時の感想や子供たちの様子です。

・②の衣浦線の地下道は、距離が長く、大人でも一人で入っていくには怖い。
・地下道の中は、薄暗くて、大人でも気持ちが悪い。
・③の二四八号線の地下道の真ん中くらいでは、まるで密室のようで、中で何があっても外からではまったくわからない状態である。
・④のミルミル前の地下道をバイクが走り抜けていったのにはびっくりした。
・①の奥山田池南側の通学路では、うっそうとした木が視界をさえぎっており、民家も四軒ほどあるが裏側になるため、大人の目がほとんど届かない状態。
・女の子が一人だったり、二人組みだったりと少人数で通っていく。
・⑤のサークルK前交差点では、自転車に乗っている子供、ヘルメットをつけてはいるが横断する時は信号が青のためほとんど左右の確認をしないで渡っている。

共通して言えることは、安全のためにとつけられた地下道や通学路ですが、どこも人通りが少なくてうす暗い状態です。朝の集団通学には良いけれども、ばらばらになる下校時には、あまり通らせたくないというのが正直な感想です。

小学校の北門の横で部活中の子どもたちを見ていて、近づくとスーと直進していってしまった車を見たという人もいます。

これからは、暑さのため薄着になったり、夏休み前で、子どもたちの気持ちもゆるみがちになるのではないでしょうか。

生活指導部では、七月七日ころに、第二回目の下校指導を予定しています。

時間や場所についても、もう一度考えて、子どもたちが、誰一人として、不幸な事故や事件に巻き込まれることのないように考えていきたいと思います。

各ご家庭でも、子どもたちがどういう道路を通って学校へ通っているか、その様子などを話し合い、安全を確認して頂けたらと思います。

「おいでん施設めぐり」に参加して

龍田陽子

午前八時三十分、お天気が心配される中、参加者全員が傘を持って学校正門前に集合しました。市側の手違いからバスが三十分ほど遅れて到着。一行三十余名は直ちに乗車し、「おいでん施設めぐり」に出発しました。

最初の見学場所は市議会場。めったに座ることのできない議員席に腰掛けて、市政についての説明を受けました。。何となく議員になったような気分で、おしりがむずがゆさを感じました。

東部給食センターでは既に当日の給食はでき上がり、各学校に配達されたり、配達に出発するところでありました。厨房は当日の給食に使用した物の後片づけと翌日の下ごしらえに入っていました。野菜を切ったり、揚げ物をしたりの、ほとんどの作業は機械がやっていました。いろいろな作業場を見学しているとき、自分の小学校のころを考えていました。あの当時は、それぞれの小学校の給食室で、早くから給食のおばさんが、野菜でも肉でも手で切り、大きなお鍋で作っていたことを思い出しました。

乙川浄水場では、川の水が、私たちの口に入る飲料水となるまでに幾通りもの行程をくぐりぬけて、ようやくきれいな水になると思うと、よく「水を大切に」と簡単に言っていることが、とっても大変なことのように感じました。

奥殿陣屋では、すばらしい日本庭園を見ながら食事をし、また、その広い庭園内を散策しました。スタートの後れが響いたのか、時間に追われ、日本庭園の良さを満喫することはできませんでしたが、もう一度十分な時間を持って来たいと思いました。

最後に岡崎製パンの工場見学をしました。学校給食用の食パンは、普通の食パンよりひとまわり小さくしているとのことなどの説明を受け、何となく納得しました。

心配された天気は何とか持ちこたえ、定刻にやや遅れて小学校に到着しました。

いろいろなことを学んだ、楽しい一日でありました。機会があれば、またこのような企画に参加してみたいと思います。

岡崎製パン工場の見学

岡崎市東部給食センターの見学

思春期教室に参加して

上地五区　　前田　貴美

去る十月二十五日、子供の家において、愛知県岡崎市保健所と岡崎市体操連盟の主催で「思春期教室」が開催されました。講師に、岡崎市内で小児科医院を開業しておられる杉浦壽康先生をお迎えして「思春期の心と特徴」についてお話をして頂きました。。会場には子供の思春期に対する接し方の難しさを思ってか、四十名ほどのお母様方が熱心に耳を傾けておられました。

講演の概略は次のとおりです。

子供とは―「子供は大人の縮図ではない」　体形の違いは大人は八頭身であるのに対して子供は四頭身～六頭身です。大脳の重量にしても四歳ですでに大人の八十％まで達していることから子供が「頭でっかち」の体形であることが分かります。子供の特徴として、①常に成長、発達している。②健康、不健康を問わず年齢に応じた世話を必要とする。③感染に対する抵抗力が弱い。④自分で危険から身を守る事が出来ない。⑤病気の進行が速い。⑥大人に対する信頼の心が育つ時期。この⑥がとても大切で信頼の心は家庭の中で愛情を注がれて、育てられる環境によって培われるものです。

発達段階に応じて好む本も変わってくるので、適した内容の書物を用意して母子で読んだりする事も、信頼の心を育てる事につながるのではないでしょうか

性教育とは―「乳幼児期からの人間教育である」　日々の生活の中で、自然に幼児が理解できる言葉で生命の大切さを教えていき、幼児期から性教育として説明する必要はないと思います。しかし、最近の性情報氾濫により性行動の低年齢化は、どんどんと進んでいます。個々の子供に合った時期（思春期）には、正しい性知識を教えてあげることが必要です。また、忍耐力をつけることも大切であり、それは思春期に入り自分の性的欲求を抑える力につながっていきます。

男＋女でひとつの生命体―　男と女は構造や色々な機能が違うので、男女平等などといってまったく同じようにできるかというと、それは不可能です。したがって、お互いがそのことを理解し、助け合うことが大切です。

テレビについて―　テレビ、テレビゲームを見続ける事によって子供たちは、自分で考える力、豊かな心を失いつつあります。色々な事で、父と母、親と学校などが連係し、一貫性を持つことは、子供にとってとても大切なことであると思います。

以上が講演の概要です。専門知識を持っていない私が内容を理解して、皆様に正確にお伝えすることができず申し訳ございません。

講演をお聞きして「乳幼児期から生命の尊さを教えていく」というお話にとても共感し、私もそうしていかなければいけないと思いました。

また、「家庭と社会とが連係し一貫性を持つ。」このことは、相互が協力し理解を密にしていかなければ難しい事のように思いました。

今後、私の課題は家族みんながより人間的に成長し続けられる家庭環境にしていく事です。その中で、親子が共に色々なことに挑戦、体験（読書・野外活動など）していく中で、子供たちの心の栄養が豊かになるようにしていくことが最も大切だと考え、努力していきたいと思います。

『海を渡った　紙風船』

――アメリカ教育事情見て歩き――

上地小学校　長坂　信一

平成五年十月八日から三十日までの二十三日間、愛知県教育委員会の事業の一環として、アメリカの教育事情視察に参加しました。多くの皆さんに世話になりましたが、私にとっては、一生涯忘れ得ない貴重な体験となりました。体験の一端を紹介して御礼に代えたいと思います。

悪天候の名古屋空港

「絶対に帰ってきて」という家族の言葉が、今も耳から離れない。

平成五年十月八日、初めてのアメリカ行きの不安を胸に抱えたまま、出発の時を迎えた。せっかくだから、あれもしたいこれも見たいと考えることは山ほどあった。

その一つが空港での武器検査だ。どのくらいのものが金属探知機に反応するのだろうか、という興味である。左の腰にいつも学校でつけているキーホルダーをつけたまま通過すると、ピーと反応した。私の予想通りだ。探知機にはある程度の大きさと厚みのあるものが反応する。

予定より三十分遅れて離陸。日本付近に低気圧があり、機体がとても不安定で、やっと一時間後にシートベルト解除のOKが出た。

アメリカ合衆国と今回の訪問都市

機上の人

離陸後の一時間で、五、六回エアーポケットに入った。それにもかかわらず機内ではドリンクサービスが始まり、続いて夕食が出された。洋食と幕の内弁当から自分の好みを選ぶことになっていた。六年生の国語の学習で機長と副操縦士は同じ食事をとらないということを思い出した。一人が食中毒などで操縦できなくなっても、もう一人ができるように、パイロットと副操縦士はやはり違うメニューの食事をする。女性の憧れの的のスチュワーデスの勤務は常に時差との戦いなので激務だと思った。

前面の中央スクリーンには映画が始まり、映画が終わると刻々と変わる飛行データが映し出される。うとうとしかけてはまた目が覚める。右前方上空にはオリオン星座が輝き続けている。

朝になった。一日たったのに今日も十月八日。着陸一時間程前から北米大陸の長い長い西海岸が見え始める。合衆国領だけで約三千キロ。窓の外にはきれいな六角形の霜の結晶が付着して、陽光に輝いている。十時半ポートランド空港着。

最初の英会話

合衆国は入国審査が非常に厳しいところで、ずいぶん手間取っていた。私は同じグループの人に続いて行ったので、比較的簡単に済んだ。

「グッド・モーニング、アー・ユー・ア・ティーチャー？イエス、アイ・アム、エレメンタリー・スクールズ、フォー・サイトシーイング、オー・ケイ。」

我々のように身分が確実な者は安心なのであろう。続いて武器の検査。にこっと笑ってハローと言いながら一見優しそうな女性係官の前を通る。しかし、職業柄なのかほほえみは返ってこない。やはり例のキーホルダーはチェックにかかる。

ホテルにチェックイン

午後三時過ぎ、サンフランシスコのホテルに着く。エレベーターに乗ると見ず知らずの男性が声をかけてきた。顔を合わせたら「ハロー、ヤア」女性がいたら「アフターユー」慣れないからちょっと恥ずかしいけれど、これが普通なのだ。日本では知らない人にエレベーターの中であいさつをする場面はまずない。

サンフランシスコのチャイナタウン（夜景）

ホテルの近くはチャイナタウン。夕食を兼ねて夜の市内を散歩する。深津校長先生や教頭先生の声が聞こえてくる。

「夜は危険だから一人で歩くなよ。」

ちょっとしたおみやげを買ってホテルに戻る。夜景をカメラに収める。日本のネオンのように派手な色でないのですっきりした感じだ。寝る前にお世話になっている皆さんに手紙を書く。はがきは日本まで一枚四十セント。日本円にして四十一円。体調維持のため十一時に就寝。初日から眠れないといけないので、大原先生（前校医さん）の薬を服用した。快い目覚めを期待して。

のんびりと観光気分

七時にウェークアップコール。思ったより爽快な目覚め。大原先生の薬の効果が大いにあったようだ。

九日（土）と十日（日）は学校が休みなので、サンフランシスコ近くの観光をする。訪ねたところはモントレー、カーメル、一年前ゴルフのUSオープンが開かれたペブルビーチゴルフコースなど。道路沿いにはいたるところにアメリカらしさが見える。農場や牧場はあまりの広さで、働いている人がいるはずなのに見えない。また軍事施設が随所にあり、案内板が見え隠れする。自然の残された海岸線はごみもなくとてもきれいであった。動物の保護を重視していることにも感心した。上地小学校のみんなに見せようと思って拾った砂を袋に詰めた。砂とは思えない優しい手ざわりの細かい砂だ。三河湾の砂とずいぶん違う。ぜひ子供たちにさわらせたい。かなり重いおみやげを最初から持ち込んでしまった。

有名な金門橋（三千三百メートル）では、同行のみんなが土産物を見ているうちに、橋を渡ってみようと走り始めた。しかし、三分の一まで行ったところで、時間切れで戻ってきた。歩道つきで三車線の赤い大きな橋だ。橋を上からつっているワイヤーの束は直径約一メートル。何をみても大きいのがアメリカだ。

ところで、観光をしながら回りを見渡すとると、十才代の若い子はとてもきれいな子が多いけれど、三十過ぎになるとずいぶん太った人が目立つ。どういうことなのかな。ちょっと太り過ぎ気味な人はアメリカに来るといいと思う。

夕方、ホテルに戻ると誰からというでもなく、

「このまま日本に帰れたらいいね。」

明日からのスケジュールがなかなかきつそうである。

サンノゼ教育委員会

十月十一日月曜日。サンフランシスコから南に車で約二時間、サンノゼ市に着いた。フリーウェイはほとんど直線だ。

歩道もついている金門橋

サンノゼ教育委員会で、毎日の訪問について実際にお世話をして下さったのは、男性のヒルさん、ダウズさん、そして女性のフランクさん。小学校の訪問で特に世話になったのはフランクさんだ。アメリカ人のジョークのうまさに最初に感心したのは、このフランクさんの車に初めて乗せていただくときのことだった。荷物をトランクに入れようとして開けたとたん、私の車と一緒であふれんばかりだった。ちょっと恥ずかしそうな顔になったけれどすかさず、

「イッツ・マイ・クローゼット」（私の押し入れだわ）

彼女は二児の母親でありながら、家から教育委員会まで四十マイルの距離を運転して往復している。相当な激務だ。

カリフォルニアは人種のるつぼである。一つの学校で平均七十か国語が話されている。しかも三十パーセント近くの子は英語を母国語としないのである。それを受け入れているのだから大したものだ。大学の教員養成学部長は

「大きな問題があるでしょうね。」という我々の問いに、

「皆さんはそう思うでしょうが、更に可能性があり、私たち受け入れ側は燃えています。それは問題ではなく、大きな挑戦である。」

何という前向きで大きな心なのだろう。そういえば教育委員会も日系の山崎さんが顧問であるとか、ベトナムからの難民であった女性のキムさんなど多人種で構成されていた。

委員会と学校との関係はかなりオープンな感じがした。各学校長の顔写真が委員会の廊下に張り出されていた。

ここサンノゼ市の最大の特長は『マグネット・プログラム』だ。磁石の教育というわけですが、子供たちの興味関心をぐっと引きつける教育ということだ。最終目的は「子供たちが人種差別をしないように賢明な行動ができるように教育すること」だ。合衆国全体でもこれから更に研究し、力を入れていくプログラムだそうです。

サンノゼ・ハイ（高等学校）

十月十二日、アメリカの高校の雰囲気はどんな感じなのだろう。楽しそうなのか、それとも危険を感じるのだろうか。我々が教室に入ると、どの子も笑顔で迎えてくれ、すっかり不安がなくなった。しかし、身長が並みはずれて大きいのに圧倒された。日本の普通教室と違い、サンノゼ・ハイでは特別教室はもちろん、同じ形式の普通教室がないことに驚いた。窓は外側の一面にだけあり、入り口側からは中が見えない。

サンノゼはシリコンバレーに位置しているので、コンピューターの導入にとても積極的だ。生徒は毎日機械に触れることができる。学習の様子を見ていると、先生が教えるという場面はまずない。プログラムにそって、一人あるいはグループで学習を進めている。困った時が教師の出番だ。教師たちは個性的な人がいる。例えば、海兵隊で実際に飛行機の操縦桿を握っていた人が退役し、教育実習生として宇宙工学の授業を担当していた。教室には飛行機の操縦席がシュミレーション形式で設置してあった。高校四年生では、実際に飛行機

シンセサイザーとコンピューター

に乗るようになっている。この学科の単位を取るとパイロット・ライセンスと同じ資格になるそうだ。

授業の間の放課は五分間。廊下は教室移動の生徒でいっぱいになる。真剣な目つきをしている。二時間目は九時十三分に始まる。なぜこんな中途半端な時間に始まるのだろう。質問すると、厳密に時間を守らせるためにはアバウトな感じの開始時間より、この方法のほうが良いとのこと。

音楽室では、シンセサイザーにコンピューターが接続してあり、生徒の練習が正しく行われているのか教師からすぐわかる。時にはこれを使って教師の側から個々の生徒に質問をする。時にはプロの演奏家を招いている。グループを作って発表会を開いている生徒もあるそうだ。コンピューターグラフィックの練習時間には我々の似顔絵もすぐ描いてくれた。

一、二年生を対象に「自己発見のための授業」が行われていた。聞こえはよいが、家庭環境などの影響で学習意欲をなくしている生徒のための教室だ。「自分がだめと思うと必ずだめになってしまう。自分がよいと思う方向を考えなさい」

ひげをたくわえた教師が、トヨタ自動車のスープラの価値を示して、語りかけるように話す。教材は週刊雑誌だ。手前の机の上には猫も受講している。「イズ・ジス・キャット・ユアーズ？」「ノー・イッツ・テイーチャーズ」

なるほど『マグネットプログラム』とはこういう感じなのかと少し分かったような気がする。

学校長と一緒に取った昼食は質素ながら、ボリュームは満点で食べきれない。最後にケーキが出て、よしこれならと思って口に入れると、これがまた甘くてたまらない。無理して食べた。教訓「おいしそうだと思ってたくさんとらない」。

昼休みには生徒会長のアイザック・マシャド君と会話をした。「ナイス・トゥ・ミート・ユー。マィ・ネイム・イズ・ナガサカ」「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ」学校新聞の写真を見ながら「ドゥ・ユー・ノー・ジス・プレーヤー」「イエス・ヒー・イズ・マイ・フレンド」「ホエン・ユー・グルー・アップ・・・・・」「ポリス・オフィサー」「オー・ベーリー・グッド、ドゥ・ユア・ベスト」「グッバィ」。果たして英会話になったのだろうか。

バーネット・アカデミー

十月十三日、バーネット中学校訪問。校長先生の名前は、ミスター・オカネ（変な感じ）。オカネさんのジョーク、「食事の予約をする際、わたしはオカネです、と言って断られたことがない」

最初に案内されたのは図書室だ。しかし、カリフォルニアでは図書室とは言わずメディアセンターとよぶ。ここもコンピューターが花盛り。調べようとすれば、エンサイクロペディア百科事典の希望ページをすぐに呼び出してプリントできる。

今までの教育水準が全米の平均よりも低かったため、教師の研修を進めながら、スタンフォード大学との会合を持ち、徐々に成果を上げてきた。それが認められて、全米八十四のモデル校の一校に指定された。

六十％の生徒がスペイン語を母国語とするので数学と歴史はスペイン語と英語の両方で行う教室もある。それをバイリンガル教育と呼ぶ。移民の子供たちのためにはESL（英語

罰として？中庭の掃除

を第二外国語としている）教育を行う。英語の読解力をつけないと他教科の学習に遅れてしまうからである。もちろん自分の学級の担任が行うわけではなく、たとえば日本語あるいはスペイン語の分かる語学の教師が確保されている。その間に進んでいってしまう他教科の遅れはどうするか心配だが、ほとんどの子は大変学習意欲があるため、一年間で追いついてしまうそうだ。日本のような詰め込みと暗記中心ではないことも幸いしていると思う。それでもなお遅れていく子はもう一年やることになる。

運動場では体育の授業が始まるところだ。通学用の制服はないが体操服はそろっている。係の生徒が三人前に出て準備運動をするのは上地と同じである。運動の内容はいわゆるエアロビクスなみで、なかなか運動量がある。

オカネ学校長と一緒に構内を巡視すると、中庭で珍しい光景を見うけた。男子生徒が二人、掃除をしている。アメリカでは生徒は掃除をしないはずだ。

「ファット・アー・ユー・ドゥーイング？」

「クリーニング・ザ・ガーデン」ちょっと遅れて「ボランティア」

とてもえらいなあ、奉仕作業で庭掃除をしているんだ、と思いきや彼らの顔つきから見て、実は罰としてやらされているのであった。子供もなかなかジョークがうまいなあと、妙な場面で感心した。

六年生（アメリカでは中学一年）の今週の時間割を見ると、一時間目は金曜までずっとサイエンス、二時間目はリーディング、三時間目はヒストリーで、いわゆる単元学習をするようになっていた。

ヒューマニティ（国語と歴史を兼ねた学習）の授業は八年生。一昨日がコロンブスデーだったのでクロスワードパズルで学習していた。その後、先住民のインディアンとアメリカの開拓史を学習していた。担任の女教師に社会科の先生はどなたですかと言われて、私は挙手をした。何か質問はありませんかと言われて黒板の前に出る。

「アイ・ハブ・サム・クエスチョン」「ハウ・ドゥ・ユー・スタディ・アメリカン・ヒストリー?」

彼らの答は次のようでした。書物などを利用して開拓者たちのことについてまとめること、当時の音楽を聴いたり、ダンスを見たりすること。そして、それらを総合的にまとめてレポートすることも学ぶ。

せっかくだから日本の歴史もちょっと話そうと決心。そのときすでに額から汗が吹き出ていた。

「マイ・ネイム・イズ・ナガサカ、ケイム・フロム・ジャパン.」

「アイ・テイーチ・ソーシャルスタディズ・イン・エレメンタリー・スクール」ここまでは慣れてきたのでまずまず。家庫の生まれは私と同じ岡崎であることが言いたい。「ドゥ・ユー・ノー・イエヤス・トクガワ?」ほとんど反応なし、これは困った。話が前に進まなくなってしまった。とっさに「ドゥ・ユー・ノー・ショーグン?」と苦肉の策。さすがにショーグンは映画になっていたので、どの子もよく知っていた。あわてて、「アイ・ウオズ・ボーン・ザ・セイム・シティ・アズ・ザ・ファースト・ショーグン.」と言って、教室を逃げるように去った。

プリント

アメリカの開拓

バーネット中学校の給食時間は三十五分間。家で弁当が用意できる生徒は各自で持ってくる。それ以外の子はカフェテリアにて給食を取る。放課同様、給食の時間にも自動販売機でジュースを買ったりするのは自由にできる。給食代は一ドル五十セントだ。しかし、低所得者の家の生徒でそれさえ払えない家庭には州の補助で無料になっている。このカフェテリアは全校生徒の集会にも使う。

学校内をほぼ一巡して事務室に案内される。各教室の担任が当日の全生徒の出欠をここに報告する。欠席者に対しては、事務員あるいは教頭が必ず家庭と電話確認する。職員室はないので、事務連絡程度ならばボックスに入れておく。緊急の場合は校内放送で連絡するようになっていた。事務室に警察官らしい人物がいたので、事件でもあったのかなと尋ねると、去年から始めたがとても有効だったので今年度もお願いし、サンノゼ警察からの派遣されたとのこと。それを聞いて帰りぎわに学校の周辺を見回すと、学校の敷地と外の道路との境にフェンスなどが無く、校内に入ろうと思えば自由に入れる状態であった。

教師の授業時間は一日六時間、あと二時間が学校での教材研究及び他の教師との情報交換時間である。原則として、教師は生徒より三十分前に来て、下校後三十分後に帰宅する。ということは、三時に生徒が下校すれば三時半ごろには学校を出ることになる。

職員の給与は平均約二十五万円である。諸物価が日本の三分の二と考えても、かなり低いと感じた。三か月の夏休みは、管理職以外の一般教員は無給であるため、それぞれがアルバイトをしなければならないそうだ。

バーネットでの二つの大きな問題は次の通りだそうだ。

一、言葉の問題・・教師自身も複数の言語力が必要。

二、低所得者家庭の問題（ドロップアウトを含む）・・普通は成績にも比例する。ホームレスが十家族ある。

六年生の尾上芳宏君の習字作品『笑顔』を手渡して、一時半にバーネット中学校を後にした。

ハシエンド・サイエンス・マグネット

十四日、朝早く雨が降る。五か月ぶりの雨だそうだ。学校訪問開始頃に、雨は止んだ。すると、これがカリフォルニアの青い空かというほどのすばらしい青空が覗いた。日本の秋晴れと違って空が輝き、山の端がくっきりしている。

学校名が示すとおり、理科教育を中心に行っている。サンノゼの小学校では一番早くマグネットプランを取り入れ、成功させている。たとえば、自分の住んでいるところの環境を学ぶために、学校の敷地内にこの地域で育っているすべての種類の樹木を植えたり、自然の状態に近い池がある。池では三年生の子がザリガニ釣りをしていた。三人の子が私に近寄ってきて「プリーズ」と言う。この子たちは自分で楽しみたいはずなのに、気軽に初対面の私にも話しかけて、釣り道具を貸してくれた。

これもアメリカらしさなのだろうか。

「イエス・サンキュー」釣り糸をたれたがどうも釣れてこない。

「ギブ・アップ. ユー・アー・グッド・フィッシャーマン」釣り糸を返しながら見ると、小さなえびをピーカーに入れていたので

樹木に囲まれた校内の池で魚釣り

「ファット・イズ・ジス?」「クレイ・フィッシュ」えびは魚の仲間なのかな。

学級園も良く整備されている。土の掘り起こしなどの労力は父兄の協力で行われることが多い。

理科室には四十種類ほどの生物が飼われている。小型のへび、とかげ、ラビット、ねずみ、小鳥などであり、どうぞと言って緑色のへびを差し出された。絶対にかまないから大丈夫と言われても、やっぱりねえ。しかし恐る恐るさわってみると意外にさらっとしていてかわいいことが分かる。そう、さわったから分かったのだ。これが一番大切なことではなかろうか。特に理科教育では。さらに一番奥には縦横二メートルほどのガラスケースがあった。何も入ってないように見えたが、体長二メートルほどの大蛇ボアであった。上地小学校でヤギやちゃぼを飼育しているから、相手が生き物だけにその苦労が良く分かる。担当の女子教員は一言

「大変といえば大変だけど、好きだからできます。もちろん休日も学校に来ますよ。」

五年生が映画『ジェラシックパーク』を見てとても感動した。そこで映画の中で現実のものと想像だけのものを考えさせ、考古学者へ手紙を出して、恐竜の大きさ、肉食か草食かなど疑問点を指摘した。そのことによりますます意欲的に学習するようになった。

ハシエンダ小学校の三分の一はアジア系の生徒でESL教育に力を入れている。毎朝始業前に両親と生徒参加で言語を指導している。また特殊教育にも力を入れている。固定式の特殊学級があり、精神薄弱、情緒障害児が学習している。担任教師はもちろん、体育などは専科のアシスタントがつく。そのため、全体学習、グループ学習、個別学習と生徒のニーズに合わせた指導形態が取られている。

さらに父兄のボランティア援助が毎日行われる。カリフォルニア全体に言えることだが、父兄のボランティアはとても献身的で、学級の子供の世話や指導を分け隔てなくやっている。彼女たち自身が年少のころから培ってきたボランティア精神の積

み重ねが現れている。職員の雰囲気もとても暖かく、昼食時には全職員の歌と器楽で歓迎してくれた。子供たちの給食はそれぞれが給食代を持って並んでいた。天気が良かったため、ほとんどの子はカフェテリアではなく外に出て、思い思いの場所で食べていた。少し時間の余裕があったので、校庭で子供たちと遊ぶ。よくやっていたのは、ハンドテニス、なわとび、キックボール、バスケット、芝生の上での自由遊び。女の子が私の手を引き、「バック転をするから見に来い」と言う。「サインして」と寄ってくる。英語でサインすると日本語も書いてくれと言う。素朴で子供らしい子供たちだ。ここは教育が全般的に成功している学校である、と感じた。

おや、玄関先にスプリンクラー。夏から秋にかけてほとんど雨が降らないカリフォルニアでは、芝生や樹木の緑を保つためには、人工的に水をかけなくてはならないからである。

紙風船、海を渡る

十月十五日、今日でサンノゼ市の学校訪問が終わる。マグネットプログラムに感心し、コンピューターの数に驚き続けたこと数日であった。いつもスケジュールを与えられっぱなしで、何か自分の心に充足感が欠けている。ブラザー印刷社長の岡田一秀先生にヒントをいただいた『紙風船の話』をどこかで実施したいと思い続けてきた。そのチャンスは今日しかないのではないか。意を決して、今日訪問する二校のどちらかに申し込んでみよう。

スプリンクラーで自動散水

ホテル・レ・バロンを予定通り八時過ぎに出発。ウイリアムズ小学校に着く。リンダ・ケイカス校長先生が玄関先まで迎えてくれた。長身でブロンズのヘアー、若々しい感じの学校長だ。メディアセンターで学校の様子を聞く。日本の幼稚園では年長組にあたるキンダー～五年生が在籍する。ウイリアムズ小学校は、サンノゼ地区では珍しく制服を決めている。これは学校よりも父兄の強い要望で決めたそうである。PTAの学校教育への援助が盛んで、たとえば一家族が一年間に最低四十時間は学校に来るように申しあわされているし、各教室には必ず父兄がいて、プログラムの準備や授業の補助をしている。学級の構成で特徴的なことは、コンピュータ授業である。五才のキンダークラスの中で優秀な子は、一年生の学習内容を一緒に勉強する。二年と三年のコンピュータ授業では、二年生は自由読書をしている中で、三年生が算数の学習をしていた。教育面でなかなか効果を上げているのだが、両親からはあまりすかれていないので、ちょっと困っているそうだ。

担任は、毎年同じ学年を受け持つようにしている。学年の学習内容を十分把握しているから、すばらしい効果を上げているそうだ。しかし、二、三年の間は良いと思うが、毎年子供たちの個性は違うし、子供自身の成長を長い目で見れないのではないかと私は思った。

昨日ハシエンダ小学校で、養護教諭のバーバラさんが別れぎわに「シー・ユー・トゥモロー」と言っていて、何の事やら不思議であったが、サンノゼ地区の養護教諭はスクールナースと言われ、一人が五校を受け持ち毎日一校ずつ巡回している。今日はウイリアムズ小学校の番なのだ。なるほど納得。また、毎週各学年の担任が優秀生徒を推薦して、校長自らが表彰する制度がある。今月末の三十一日がハロウインなので、今日は黄色の賞状とクッキーをプレゼントするそうだ。よし決めた。ここの校長先生ならば申し出を受けてくれそうだ。だめでもともとだ。思いきって『紙風船の授業』のプロポーズ（申し込み）をしてみよう。

ミス・コーリン・ステファンズ・クラス

ここで思いきって頼まないと、一生涯「しまったなあ、あの時に」ということになりそうだ。

「アイ・ウッド・ライク・トゥー・ハブ・ア・レッスン」（授業をやってみたいのですが）という私の要望は、受け入れられた。最初のクラスは四年生だから、そこでやったらどうだろうと勧められた。

リンダ校長先生から、担任のコリン・ステファン先生に了解を取って頂いた。私の心の準備はある程度できていた。教室に入ると、まず担任の先生と握手した。

「ナイス・トゥー・ミート・ユー」

子供たちのほうへ向きを変える。子供たちの視線が私に集中する。張りつめた糸が切れんばかりの緊張感。（えっと最初は何だっけ。そうそう、まずは大声であいさつだ。）

「グッド・モーニング・エブリボディ」すぐに三十名の「グッド・モーニング」が返ってきた。

「マイ・ネイム・イズ・ナガサカ、ケイム・フロム・ジャパン」（日本から来た長坂です）

紙風船を使って授業

少し落ち着きが出てきて教室を見回す。色白のかわいい女の子がいる。元気そうな男の子もいるぞ。みんな、この人は今から何をやるのだろうかと興味しんしんだ。

「ナウ・アイ・イントロデュース・ジャパニーズ・トイ」（日本のおもちゃを紹介するね）

ポケットに隠してあった紙風船をゆっくり取り出した。紙風船は小さくたたんだままでもとてもカラフルだから、あれは何だろうという目つきをしている。顔の前に紙風船をかざして、大事そうにそっと息を吹き込む。ふくらむ風船、身をのり出す子供たち。

「ジス・イズ・バルーン、メイド・バイ・ペーパー」（紙で作った風船だよ）

ふくらんだ風船を右手の上で、軽くはずませる。

次に左手の一番前にいた男の子を指名して「スタンド・アップ・プリーズ」（ちょっと立ってごらん）。私と二人でポンポンとキャッチボールをする。とても楽しそうにやってくれました。（彼はその後手紙を書いて、僕が先生と一緒に風船をやったんだと知らせてくれた。）

私は紙風船を自分の手に戻すと、急に両手でくしゃくしゃともみつぶした。心配そうな子供たち（何をするんだ、この日本人は。せっかくきれいにふくらんでいるのに）。子供たちを心配をさせることが、この授業の大切なところだ。まずは成功だと思いつつ

「ハウ・ドゥ・ユー・インフレイト・ウイズアウト・ブレス」（息を使わずにふくらませるかな）　ちょっと意地悪そうな顔をして、子供の反応を楽しみながら、教室中を見回す。最初に挙手をしたのは、右側の女子。「プル・ボウス・ハンド」（両手で横に引っ張ったらいいわ）。これは私の予期しない答でした。でも間違いではない。「ザッツ・オー・ライト」（うん、そうだね）「サムワン・エルス」（ほかの子はどうかな）続いて左手の男の子。

「マイ・ファーザー・ハズ・ア・ポンプ・アイ・ブロウ・アップ・ザ・バルーン」（家に帰ると、お父さんがポンプ持ってるからさあ、ポンプでふくらましてあげるよ）

「ザッツ・オー・ライト」「イッツ・グッド・アイディア」ありがとう、優しい心の子だね。これも間違いではない。さらにいろいろ聞きたかったけれど、残念ながら許された時間がないので次の実験を続けることにした。

「アイ・キャン・インフレイト・ジス・バルーン・ウイズ・オンリー・ワン・ハンド」（先生は片手だけで、この風船をふくらませるよ）。さあ、やってみるよ。

「レッツ・ナンバーリング・トゥギャザー」（数えてね）

「ワン・ツー・スリー・・・・」

風船を打ち上げるにつれて、子供達の声がだんだんそろってきた。それとともに声に力が加わってきた。

「・・・・・サーティワン・サーティツー」「ストップ」三十二回で元通りになった。ほっとした雰囲気の中で、大きな拍手が自然に沸いた。ここで子供たちにも遊ばせるために、同行の先生に協力を頼んで、紙風船をひとつずつ配った。

紙風船はいつも子供の心を引きつける

「レッツ・プレイ」（遊んでごらん）

子供たちは、紙風船の素朴さを感じているだろうか。無心に風船をふくらませる子供たち。世の中の暗さもつらい生活も何もかも忘れて、純粋な気持ちでいるだろう。どの子も晴れ晴れとして、すばらしい輝きの顔をしていた。しばらくは教室中が紙風船でいっぱいになった。時間が気になり、

「ストップ、ストップ」「ビー・クワイエト」（はい、それまでよ。静かにしておくれ）

紙風船を子供たちに例えると、次のようになる。片手で風船をつくと、だんだんふくらむ。風船をたたいているようだが、それは暴力なんかではない。おい頑張れよという励ましであり、両親や先生方の教えであり、またいろいろな刺激や緊張感なのだ。

さてさて、そういうつもりで四年生に話をしたがどのくらい理解できたでしょうか。子供の反応を見るかぎり、正直言って余り分かっていないようだ。じっくり話せなかったことと、私の英語力のなさが原因だろう。でも、落ち込むことはない。子供たちの心には十分『紙風船の心』が伝わっていると信じたい。将来きっと思い出すだろう。ありがとう。リンダ校長先生、ステファン先生、そしてすてきな四年生のみんな。感謝しています。（一か月後に全員の感想文が送られてきた）

Dear Mr. Nagasaka,

How are you doing? Well, I am fine. Thank you for coming all that way to meet us at Williams Elemantary School. Thank you for a paper balloon. I can hit it without letting it touch the ground 88 times. I hope you come back soon. My brother really likes it, too. I like it because it cannot pop, it cannot run out of air even with a hole in the top, and, plus, it can fit in your pocket. I also like it because it is useful in many ways.

Gratefully yours,
Justin Poole

Mr. Nagasaka,

Thank you for coming to our school and giving us the paper balloons. We really enjoy them. Everyday when I come home from school, I bounce it around for awhile. When my brothers come home, we always bounce it around for awhile before dinner. All my friends think it is really neat! When they come over they always want to play with it. I really hope you can come to Willaims School again.

Greatfully yours,
Jenny Kaefer

授業の感想文の一部

ここウイリアムズ小学校で感心したことは、五才児でさえもきちんと整列ができ、決して並んでいる前の子を押したりしない。どのような指導がされているのだろう。

「合衆国の社会では、殺人や犯罪が多くて大きな問題になっている。しかし人権を大切にするという原則を考えると、人に手を出すことは人を傷付けることだから一番いけない。幼児のころからしつけとしてしっかり守らせたい。」

校舎を一巡してもどるころに、キンダークラスのシナさんが来て、絵をプレゼントしてくれた。黒い色画用紙に、かわいい白い手形がたくさん押されていて、ハロウインが近いなあと思わせる絵であった。その絵は前上地小学校の嶋田先生の幼稚園で保管しています。

一か月後に送られてきた感想文には、

「家に帰って、食事の前には弟と一緒にいつもやってるよ」「私は八十八回もやれました」「紙風船で遊んでいると十月のあの日を思い出します」「先生また来て下さい」

などという嬉しい言葉がたくさん書かれていて、生涯忘れ得ない思い出となった。

アメリカの大学は入学は誰でもできるが、卒業はかなり難しいと日本では言われている。実際はどうだろう。サンノゼ市の近くには、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校という有名校がある。これらの大学は成績を五段階にした場合、平均四・八以上でないと入学できない。二年制のコミュニティカレッジには、希望により高校卒業後に入学できる。意欲があり学力が高い学生はコミュニティカレッジを卒業後、四年制大学の三年生に編入できる。我々の考えより厳しいと感じた。

日本とほとんど同じような気温なのに、街路樹は熱帯性のやしなどが目立つ。地中海性気候なので冬でも平均気温が十度くらいである。出発前に心配していた飲料水はヨセミテ国立公園より補っていて、生で飲んでも大丈夫。

壮観、七千の風力発電機

十六日と十七日は観光日だ。ヨセミテ国立公園に向かう。都市部を過ぎると、広大な平原と高原地帯だ。乗車後しばらくは山、畑、道路など珍しかったが、しばらくしてうとうとし始める。目を覚ましても、前の景色とほとんど変わらず味気ない。郊外の電柱は今も木製だ。土地は肥えているがとにかく水不足で、灌漑施設のあるところはアーモンド、あんずなどの木や野菜が育っている。途中のガソリンスタンドをのぞくと一ガロンで一ドル十五セントほどで、日本の約三分の一の価格だ。何号線という道路番号は東西方向が偶数、南北方向が奇数で表されている。

少し山間部に近づいたと思ったころ、遠くにたくさんのプロペラが見えてきた。羽根の長さが七メートルから十五メートルほどの巨大な風車である。盆地と丘の上という上昇気流を利用した風車だ。全部で七千機以上もあり、サンフランシス湾地域の三分の一の電力を供給しているそうだ。山越え谷越え、一車線の道路を時速九十キロどうしの車がすれ違う。シュッという風を切る音が怖かった。ヨセミテ国立公園の広さは東京都の一・五倍。絵はがきに出てくるポイントからの眺めはすばらしいの一語につきる。昼食のころから雨が降ってきた。さっきのすばらしい眺めはもうない。公園内の途中で下車して自然の雄大さを味わったが、車の排気ガスがひどく日本の観光地と同じ運命になるのではないかと、心配になった。

わたしゃ、『カリフォルニアからルイジアナ』へ♪♪♪

あこがれのミシシッピ川流域のルイジアナ州への移動日だ。直行便がないのでダラス経由で行く。ダラス空港は何という大規模な空港なのだ。乗り継ぎのためにモノレールにのって五分も移動する。滑走路は何本なのか分からない。「歴史（時間）の日本、空間のアメリカ」を実感する。乗り換えた飛行機は、何と四十人乗りのプロペラ機。天候も段々下り坂。遠くで稲妻が光っている。私は以前小型セスナにも、日本製のプロペラ機YS十一にも乗ったことがあるので心配していないが、みんなはとても心配していた。離陸してから約一時間半後の午後七時、うす暗くなった空の下で大地が光っている。川のようだが違う。これが大湿地帯だ。ルイジアナへ来たんだなあ。

ぼくのスーツケースはどこ？

天候のせいもあって一時間遅れでラフィット空港に降り立つ。ラフィット市は人口七万人の小都市。滑走路から空港ロビーまでは歩き。タクシーを捜そうとして出口から外へ。玄関にいた警察官に近寄ると「ファット・ランゲッジ・キャン・ユー・スピーク？」（君は何語を話すのか）「アイ・キャン・スピーク・イングリッシュ・ジャスト・ア・リトゥル」（英語をちょっとだけ）「ウイー・ニード・スリー・タクシーズ」（タクシー三台お願いします）「オーケー・オーケー」意外に親切な方でした。チップを渡そうとしたが受け取ってくれない。ところが、飛行機に積んだはずのスーツケースが待てど暮らせど、出てこない。よくある話とは聞いて来たが、まさかここで現実となるなんて。明日からの学校訪問の土産も資料も、自分の洋服もなし。泣きたい気持ちとはこのことだ。この問題を解決した英語科の先生には頭が下がる。

ラフィット市

ラフィット市は名古屋の服部君事件で有名になった州都バトンルージュの西二百キロに位置し、東海岸のノバスコシア半島からミシシッピ川を下って逃げて来たフランス人が開拓した町。フランス系の自分たちの文化を保存する空気がとても強い。小学校二年生からフランス語の授業が行われている。十月下旬でも日本の七月なみの暑さで、オークの大木がいたるところに茂る。日本企業はなく、日本人がほとんどいない。好奇の目で見られただろうが、どの学校も我々を大歓迎してくれた。カリフォルニアと同じで、キンダーから高校までが義務教育。全米五十州の中でも、教育水準は下位に位置するそうだ。

十月十九日。ラフィットでは高校卒業後に就職する生徒が多いので、職業訓練的なセンター（キャリアセンター）が設置され、午前中三時間以内のプログラムで実施される。商業美術・木工技術・写真・自動車整備・看護学・秘書技術などを学び、午後には自分の所属する学校に戻る。看護学を学んだ生徒は准看護婦の資格が取れる。ここはメディアセンターの役割も持っていて、ビデオ教材が整備されていたる。プロダクションルームでは、生徒作品のパッキングを父兄が行っていた。自動車の免許については十五才になれば運転可能ということで十四才のミドルスクール（中学生）から運転実習をする。それだけ自動車中心の世界なのである

ポール・ブレイク中学校

選ばれた優秀な生徒のためにG・T（ギフテッド・タレント）プログラムが設置され、市内の各中学校から通学してくる。授業時間は一週間に三時間以内だ。音楽室を昼食の会場に準備して迎えてくれた。中学校だけれども、ヘッドスタートとい

って、三才児からの学級が二クラス設置されている。

家庭での学習環境に恵まれない子を、優先的に入学させるようだ。その四才児が身ぶり手ぶりで歌と踊りを披露してくれた。ほんとに子供らしくてかわいい。お礼にここでも『紙風船』をプレゼントし、しばらく遊ばせた。この模様はCBSラフィット支局のテレビ局の取材を受け、夕方五時過ぎに放映された。

校内の案内は十三才のボニーさん。彼女はジャパニーズコースを専攻し、日本へぜひ行きたいと言っていた。

週休二日制はどうなっているか

案内してくれた彼女に、週末の使い方について聞いた。友達はサッカーやベースボールをやるけれど、私は先週土曜日に家の人と一緒にショッピングに出かけた。テレビも見た。日曜日は九時から家族そろって教会に行った。ほかの同級生たちもよくにているそうだ。もっとも、クラブチームに参加するには、家族の協力（特に送り迎え）が不可欠だ。

同じ質問を教師たちにすると、家族との時間を大切にする日だ、土曜日や日曜日のために働いているようなもんだ、という返事。なんと平凡な質問をするのかといわんばかりだ。中にはほかの仕事（塾の教師など）をする人もあるそうだ。

我々の生活とは、考え方が根本的に違うようだ。

ホールド　アップ

十月二十二日金曜日。ノースサイド・ハイは生徒数千二百名の高校。貧しい地域に位置し校内の雰囲気はやや荒れている感じがした。玄関前にパトカーが止まっている。以前は銃を持って登校する生徒がいたが、今はいない。しかし年に数回警察官の立ち会いのもとで凶器の所持をチェックしている。ちょうど今日がその日に当たったのだろうか。校舎を回り始めて、階段を上がった所の廊下で男子生徒が並んでいた。重々しい雰囲気で所持品検査が行われていた。警察官二人の前で、生徒はホールドアップして、不服そうに検査を受けている。写真を撮ろうと思ったがとても近づけない感じだ。

また、麻薬犬を使って毒物のチェックもしている。校長先生と二人の副校長はトランシーバーを持って校内巡回している。学校管理は校長や副校長が、生徒指導はカウンセラーが、というように仕事がかなりはっきり分業化されている。この学校の生徒は就職希望者が多く、午前中はキャリアセンターへ通って授業を受けている。

スクールバス

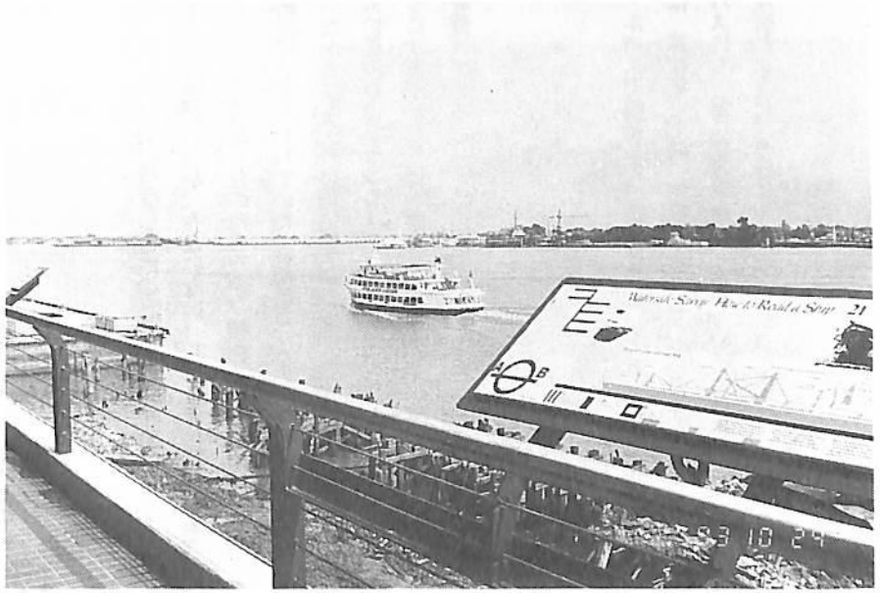
ラフィットの学校参観は、スクールボード（教育委員会）のスクールバスで移動した。学生たちのほとんどがバス通学である。通学距離が長いので通学団とか徒歩通学はまずない。朝の時間は、高校生が七時、中学生が七時半、小学生が八時というように時差通学をしている。帰りは反対で小学生が一番早い。どのバスにも、窓に武器禁止のマークがついている。今日も午前中二校、午後二校の強行軍。三時半にホテルに着く。みんな相当な疲れようだ。今日は十月の下旬だが、温度計を見ると、三十度。毎日つけている万歩計をみると、九千百六十歩。

あこがれのミシシッピ川

まるであやつり人形のように学校から学校へ、そしてクラスからクラスへという日程が一区切り。

朝八時ニューオーリンズにむけて出発。国道十号線で東南へ。主要国道は、アイゼンハワー大統領の時代に町をよけて作ったため、広大な土地を直線的に走る。十キロ以上も直線が続き、直線の先が見えないのである。行き交う自動車は色も形も多種多様で見ごたえがある。いたるところに大湿地帯があり、小舟で漁をする姿を見かける。よく慣れた地元の人でもどこに入り込んだかわからなくなり遭難するそうだ。取れるのはクレイフィッシュ・キャットフィッシュ、何だか分かるかな。

ニューオーリンズは、見どころがいっぱいで楽しめる。街角に馬車も走っている。騎馬に乗った警察官にも出合った。ミシシッピ川のほとりで、昼食をとる。目の前に広がる雄大な大河と言いたいが、意外に川幅が狭い。河口から二十キロの所で約六百メートル。しかし、よく説明を聞くと、深さが六十メートルもあり、数万トン級のタンカーが自由に航行できるそうだ。



水量が余りにも多いために、海に出ることができず、流れが複雑である。今年の夏に上流で大洪水が起きたがやっぱりすごいなあ、納得した。

メキシコ湾を見たい

このまま下流に行けば、メキシコ湾にたどり着く。二十キロで湾が見えるはずである。よしタクシーを飛ばそうということになった。しかし、聞いてみると我々の希望は達成されそうもない。下流は大デルタ地帯で湿地になっており、普通に考える海岸線ではない。海岸線に出るには船が必要である。残念だがあきらめた。

ニューオーリンズの夜は何と言ってもジャズ。しかし、有名な所はどこも満員。特にフレンチクォーターと呼ばれる地域は活気にあふれている。外からつま先立ってのぞくと、老いも若きもリズムに合わせて楽しそうに踊っている。一時間以上探して、やっと見つけた店で、しばらく演奏を聴く。料金は食事あるいは飲み物代のみ。ジャズは生活の一部なのだと実感した。

今日の万歩計は一八八五三歩。今回の旅行中の最高歩数。

日曜日も、しばらくニューオーリンズ市内。彼らの墓地は大変な金額をかけて作る。湿度が高く、石室内が四十度以上になるので、遺体が一年で白骨化するので墓の下に平板が置いてある。

鉄道の踏切を渡ったが、どの車も一旦停止をしない。警報機がなっていても、横を見てそのまま渡ってしまう。下手に止まると追突事故になるそうだ。こわいこわい。

シティーパークは十分な広さがある。野球場はもちろん、五十五面のテニスコート、十八ホールのゴルフ場四か所など、さらに数多くの広場ではいろいろなイベントを行っている。三千円でゴルフができると聞いて二度びっくり。

学校訪問はあと二日

十月二十五日、プランテーション小学校。この学校は五才児から三年生までがいる。つまり三年生が最高学年である。ラフィットには日本人がいないと聞いたが、ここには留学生がいて三年生の日本語クラスを受け持っていた。カリキュラムなどは一体どうなっているのだろうか、心配になってくる。玄関で日本の歌の歓迎を受ける。曲名は「さくらさくら」。

今までの三週間に、道徳の授業が一度もなかった。道徳はどうなっているか。カウンセラーが回ってきて、年に三回ほど道徳と学級指導を合わせたような授業をする。倫理の問題は家庭でするものだから、それで十分という考えだ。むしろ宗教上の基盤が違うので問題になりかねない。では内容はというと、基本的なしつけと自分の身を守ることについての指導が中心。

午後はブロードモア小学校。地域の人の協力が学校教育の効果をあげている。父兄のボランチアが学級へ毎日二、三人来て面倒を見てくれる。休日以外は学校がオープンなので授業参観は一切なし。

図書館利用にもコンピューター

二十六日、キャレンクロ・ハイツ訪問。三才から五才児と、四年生までが在学している。児童数八六九名、職員数七十六名、個人指導が行きわたり、子供たちは恵まれている。読書意欲の向上を目指して次の手だてを取っている。

一、推薦図書を決めて学年別に色分けをする。

二、読書後、コンピューター相手に質問に答える。

三、得点によって賞品が出る。

四、参加は強制しない。個人の意思で行う。ただし一人一回。

ゲームの好きな子には楽しいだろう問題は、プログラムが市販の物なので、子供の実情に十分合っていない点である。

学校訪問に感謝！！！

学校、教育委員会、通訳の方など、ずいぶんいろいろな方に世話になった。観光旅行では決して経験できないことも多かった。失敗もトラブルも数え切れない。思っていたことと実情の違いの大きさに、今あらためて驚いている。最終的に共通するのは、『教育は人』である。無事に帰れて、感謝、感謝。

あとがき

『ふるさと上地その7』の発刊をむかえることができました。学区、学校の接点としての役割を持つ学校だより「上地」（月刊）を項目ごとにまとめました。

取材にあたっては、学区の方々はじめ多くの方々から親切に教えていただきました。厚く御礼申し上げます。

私たちは、この冊子を作るにあたり、次のことを念頭に置いて進めてまいりました。

一、手作りであること

二、足で調べたり書いたりしたものであること

三、できるかぎり子どもにも参加してもらうこと

力不足のため、或は調査不足のため、記載事項に誤りもあろうかと思います。その節は遠慮なく指摘して頂き、ご指導をお願いしたいと思います。

本年度は、学区・学校創立十一周年を迎え、新たな気持ちで、上地の伝統を築いていきたいと考えます。「学級づくりを基盤とした学習指導」と題し、先輩たちが作り上げてきた研究を継続・発展させていきたいと考えています。本書が学区・学校の更なる発展の一助となれば幸いです。

岡崎市立上地小学校教務主任　菅沼　剛

一年生と六年生の交流

研　究　同　人

深津　武司	松原　晄三	菅沼　　剛	長坂　信一	竹内　孝之
熊谷　洋子	鈴木　純子	遠山　洋子	鈴木　尚子	坂爪ひとみ
松井　敬子	杉田　雅子	土屋　恵子	岡本きみ忍	高橋由美子
鈴木千恵子	木村　和子	高田加代子	冨田　典子	清水由美子
森下　初子	杉浦　美香	鶴田　秀幸	杉本　　峰	松永　千鶴
竹平　真仁	岩井　政美	松坂　禎文	小田　英宣	深津　伸夫
西田　貴子	寺澤祐喜江	太田　智恵	神谷二左絵	酒井　啓子
佐野真由美	松崎　富香			

ふるさと上地　7
発行日　平成6年3月19日
発行者　岡崎市立上地小学校
校長　深津　武司
岡崎市上地３丁目３１番地
電話（0564）５３－０５０１
印刷所　大日印刷株式会社